

農作物生産情報

(令和4年5月)

気象

(令和4年4月21日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)
東北日本海側では、天気は数日の周期で変わりますが、気温は高くなる見込みです。

水稲

健苗育成と適正施肥で、良食味・高品質米を生産しよう！

1 育苗

(1) 温度管理

5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も上昇するため、積極的な換気に努める。

降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。

■温度管理の目安

葉数	温度
出芽揃～1.5葉	日中30℃以下、夜間5℃以上
1.5葉～3.0葉	日中25℃以下、夜間5℃以上
3.0葉～3.5葉 (田植え)	日中20℃以下、夜間5℃以上 田植え5日前頃には、霜注意報発令時や強風の時以外は、できるだけ夜間も外気に慣らし、丈夫な苗に仕上げる

(2) 水管理

かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。

機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齢が進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣るので、育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。

(3) 追肥

田植え前に苗の葉色が淡くなった場合は、1箱当たり硫安5g（窒素成分で1g）を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2 本田

(1) 畦畔の補強

畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が劣ったり、低温時の深水管理が十分できなくなるので早めに補強する。

(2) 施肥

昨年、稲が倒伏したり、いもち病が発生した水田では、窒素量を減らす。

窒素量が多すぎると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

■施肥量（窒素成分量）の目安（中苗移植）

品 種	施肥体系	窒素総量 (10aあたり)	基 肥 (10aあたり)	追 肥 (10aあたり)
つがるロマン	表層 1 回追肥	6～8 kg	4～6 kg	2 kg以内
まっしぐら	表層 1 回追肥	6～9 kg	総量の 7～8 割	総量の 2～3 割
	表層 2 回追肥		総量の 6 割	1・2 回目とも 2 割
青天の霹靂	・施肥体系は表層 1 回追肥体系を原則とする。 ・適正な生育量が確保できるよう、 <u>基肥は窒素成分量で 6 kg/10a 程度とする。</u> ・追肥時期は幼穂形成期とする。 <u>追肥の窒素成分量は乾田で 2 kg/10a、半湿田で 1 kg/10a 以内を目安とする。</u> ・転作後の復元初年目の水田は施肥による生育コントロールが困難なので、作付けしない。			

(3) 代かき

代かきは、田面に高低差が生じないように行う。

生わら鋤込み田や田畑輪換田等の作物残渣がある水田では、残渣を土中に鋤込むため、浅水で代かきを行う。

(4) 田植え

日平均気温が 13℃以上になるときを目安とする（五所川原アメダスの平年値では 5 月 10 日以降）。代枯れ防止と活着促進のため強風の日を避け、温暖な日を選ぶ。

「青天の霹靂」の栽植株数は 70 株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。

(5) 田植え後の水管理

田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。

昼間止水・夜間かんがいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。

■水管理の目安

生 育 期	暖かい日の水深	寒い日の水深
分けつ期	3 cm 程度の浅水	5～6 cm 程度の深水

(6) 除草剤の使用法

除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草（アゼナ、ホタルイ等）が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるため、これらに効果のある除草剤を選択する。

初期＋中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。河川等の水質を保全するため、散布後 7 日間は絶対に落水・掛け流しをしない。

(7) 病害虫防除

ア 箱施用剤使用の留意点

いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農薬の登録内容等を確認して適正に使用する。

イ イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。

発生が多い場合には6月上旬頃に水面施用剤を散布する。この時期の防除によりイネドロオイムシも防除できる。

ウ 葉いもち

補植用苗をほ場に放置したままにしておくと「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。

(8) 農薬危害防止

育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農薬処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニールシートなどの無孔シートを使用するなど、農薬が土壤に浸透しない対策を行う。

畑 作

大豆の適正は種、小麦の適期追肥で生育量を確保しよう！

◆大 豆◆

1 ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きよを掘る。

水稲作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0～6.5を目標に土壌酸度を矯正する。

水分が多い状態での事前耕起は、ほ場の物理性が悪化するので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。

湿害を受けやすいほ場では、「うね立ては種」等で被害を軽減する。

2 は種期・栽植密度

は種適期は5月中旬～下旬、は種量は7～8kg/10aを目安とする。栽植密度は畦幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。

は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。

やむを得ず、は種が遅れる場合は株間を詰め、は種量を増やす。

3 施肥量

基肥は、窒素成分量で2～3kg/10aを基準とし、土壌条件、連作等を考慮し増減する。

4 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

剤名	鳥害防止	紫斑病	アブラムシ類 (わい化病)
キヒゲンR-2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

○：効果あり ×：効果なし

注) クルーザーFS30 は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンR-2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

5 根粒菌の接種

大豆栽培初年目のほ場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6 その他

は種後、速やかに土壌処理除草剤を散布する。ほ場の碎土が粗い場合や、ほ場表面の水分が低い場合は効果が劣るので、耕うんをていねいに行うとともに、明きよやサブソイラー等による排水対策を行う。

◆小麦◆

1 生育

ネバリゴシは、越冬前の生育が過繁茂ぎみだったこと等から、雪腐病の発生が見られた。草丈は平年を上回ったものの、茎数は平年を下回った。

キタカミコムギは、は種日が平年より11日遅く、生育量が少ないことも影響し、雪腐病の発生はほとんど見られなかった。草丈、茎数は平年を下回った。

■生育状況 (県生育観測ほ 4月11日現在)

品種 (地点名)	年次	は種日 (月日)	幼穂形成期 (月日)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)
ネバリゴシ (つがる市木造出来島)	本年	9/20	3/30	23.6	695
	比・差	(3日早)	(7日遅)	(120%)	(80%)
	平年	9/23	3/23	19.6	873
	前年	9/30	3/23	22.9	1,078
キタカミコムギ (つがる市木造吹原)	本年	9/28	4/11	16.5	574
	比・差	(11日遅)	(13日遅)	(73%)	(65%)
	平年	9/17	3/29	22.5	878
	前年	9/23	3/29	29.3	1,377

2 追肥

2回目の追肥は、一穂粒数の確保やタンパク質含有率向上に有効な「止め葉抽出期」から「出穂期」頃で、例年5月中旬から下旬頃に、次の目安を参考にほ場を観察し、適期に実施する。

なお、追肥量は、窒素成分で2kg/10aを基準とし、生育に合わせて増減する。

■追肥判断の目安

追肥時期	判断の目安
止め葉抽出現期	止め葉が全体の4～5割開いた時期
出穂期	ほ場全体の茎の40%～50%が出穂した時期

3 排水対策

転換畑では出穂期以降の湿害を防止するため、明きよの設置や排水溝の点検を行う。

4 病虫害防除

(1) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなるので、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布により防除する。

感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）が生産され、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できなくなる。

(2) うどんこ病

茎数が多く、草丈が伸びているほ場で発生し易いので、病虫害発生予察情報等に注意し、適期防除に努める。

りんご

平年より生育早まる、霜害防止対策をきちんと行おう！

人手受粉も行い、結実の確保に努めよう！

黒星病重点防除時期なので、薬剤の散布間隔は10日以内を遵守しよう！

適期作業と適正防除で良品生産を目指そう！

県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの発芽日は4月9日（平年4月8日）で平年より1日遅かったものの、4月9日から12日の高温の影響で、展葉日は4月13日（平年4月18日）で平年より5日早かった。

今後の気温が平年より2℃高く推移した場合、県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの開花日は平年よりも6日早い5月2日頃と予想される。

1 霜害防止対策

これから開花前後は最も低温に弱い時期となる。花蕾着色期で-2℃、開花始め～落花期で-1.5℃～-1.7℃の低温に約60分遭遇すると被害が出始める。

降霜は、晴天無風で午後7時の気温が6℃以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。今年も生育が早まっており、霜害を受ける危険が高くなっているため、霜害防止対策を確実に実施する。

(1) 燃焼法

霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。

■燃焼資材

種類	利用方法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

- 注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
 2 " 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要
 3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発生する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

(2) 送風法（防霜ファン）

防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定しておく。
 寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が低いので燃焼法を併用する。
 幼果期に被害を受けた年もあったことから、結実後でもファンのスイッチは切らない。

(3) 事後対策

開花期までに霜害にあった場合は、結実量を確保するため、必ず人手授粉を実施する。その際、めしべの被害程度を確認して授粉する。

2 結実確保

マメコバチを導入していない園地では、安定した結実量を確保するために人手による授粉を徹底する。また、マメコバチ導入園においてもその数が少ない場合や開花期に不順天候が続く場合には、人手による授粉を行って結実確保に努める。

3 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、摘花を積極的に実施する。ただし、降霜常襲地帯や開花期に天候不順が予想される場合は、一輪摘花の実施や摘花剤の使用を控え、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘花

ア 人手による摘花

弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。

イ 摘花剤の利用

開花量が多く、結実が十分確保されると見込まれる場合は、摘花作業時間が20～30%程度短縮できるので、石灰硫黄合剤又はエコーキーを積極的に利用する。使用方法は次表のとおりである。なお、いずれの剤も全品種に使用でき、展着剤は不要である。

■石灰硫黄合剤及びエコーキーの使い方

薬剤名	散布時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10a当たり散布量
石灰硫黄合剤	満開後 (頂芽花の満開日とえき芽花の満開日)	2回	—	100～ 120倍	350～ 500ℓ

エコーキー	満開日 追加散布を要する場合は その2～3日後に1回	2回以内	2回以内	100～ 150倍	300～ 600 ^{リットル}
-------	----------------------------------	------	------	--------------	-----------------------------

- 注) 1 満開日とは7～8割が開花した日で、花びらの散り始めでもある。
 2 マメコバチに対して害作用がないので、マメコバチ導入園で利用しても良い。
 3 ミツバチ導入園で石灰硫黄合剤を利用する場合は、散布前にミツバチの巣箱を回収する。
 4 エコーキーは、花そう葉又は新梢幼葉の葉縁部に褐変（葉焼け）症状が発生する場合がある。

(2) 摘 果

ア 人手による摘果

摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期（落花10日～15日後頃まで）にはまず一つ成り摘果を行う。

ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。

仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。

イ 薬剤による摘果

ふじ、王林、陸奥、北斗、シナノスイート、さんさ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃（ふじでは横径が10mm位の時）、紅玉は満開後3週間頃（横径が16mm位の時）にミクロデナポン水和剤85（1,200倍、展着剤加用）を、果実に十分かかるよう10a当たり350～500リットル散布する。

■標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)
紅 玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・さんさ・きおう・トキ・早生ふじ・未希ライフ・千雪・シナノスイート・シナノゴールド・ぐんま名月	4頂芽に1果	25
北 斗	4.5頂芽に1果	22
陸 奥・世界一	5頂芽に1果	20

4 病虫害防除

(1) 黒 星 病

「ふじの落花20日後頃」までが最も重要な時期なので、**10日間隔で散布**する。散布予定日に降雨が予想される場合は、前日に散布する。低温、多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。

(2) 腐らん病

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。

胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

ア 泥巻きを行う場合は、周辺健全部を含めて病患部に厚く泥を張り付ける。

イ バッチレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部を含めて病患部を紡錘形に削ってから塗る。

ウ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下約5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。
 エ 胴腐らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

(3) ミダレカクモンハマキ

発生が多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル、カスケード乳剤、アタブロンSC、ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDFのいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

(4) リンゴコカクモンハマキ

越冬世代幼虫が多い園地では「落花直後」にカスケード乳剤又はアタブロンSCを散布する。

(5) クワコナカイガラムシ

発生が多い園地で、「展葉1週間後頃」にアプロードフロアブルを散布しなかった場合は、「落花10日後頃」と「落花20日後頃」に薬剤による胴木洗いを行う。

■薬剤散布【農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

回	散布時期	基準薬剤	散布量 kg/10a	
第2回	ふじの開花直前 (5月1～3日頃)	SDHI剤	320	
		オルフィンフロアブル		4,000倍
		ネクスターフロアブル		1,500倍
		フルーツセイバー		2,000倍
		カナメフロアブル		4,000倍
第3回	ふじの落花直後 (5月11日～13日頃)	パレード15フロアブル	2,000倍	
		ミギワ20フロアブル	4,000倍	
		+		
		デランフロアブル	1,500倍	
		又はチウラム剤	500倍	
第4回	ふじの落花10日後頃 (5月21日～23日頃)	チオノックフロアブル	350	
		トレノックスフロアブル		
		又はマンゼブ剤		600倍
		ジマンダイセン水和剤		
		ペンコゼブ水和剤		
第5回	ふじの落花20日後頃 (5月31日～ 6月2日頃)	炭酸カルシウム水和剤	100倍	
		ユニックス顆粒水和剤47	2,000倍	
		+		
		チウラム剤	500倍	
		又はマンゼブ剤	600倍	
第5回	ふじの落花20日後頃 (5月31日～ 6月2日頃)	炭酸カルシウム水和剤	100倍	
		デランフロアブル	1,500倍	
		又はチウラム剤	500倍	
		又はマンゼブ剤	600倍	

※1 散布月日は目安であり、天候や生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する。

特産果樹

霜害防止対策の徹底と適期作業、適正防除で良品生産を目指そう！

◆ 共通 ◆

1 霜害防止対策

りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

◆ ぶどう ◆

県生育観測ほ（鶴田町境）のスチューベンの催芽日は4月12日（平年4月15日）で平年より3日早かった。なお、発芽日の平年は5月1日である。

1 摘芽・摘梢

養分の競争を防ぎ、日当たりや通風を良くするため、できるだけ早く実施する。

不定芽から伸びたもののうち、予備枝として利用できるもの以外は摘除する。

晩霜害の恐れがある園地では、6月上旬の晩霜の心配がなくなってから最終新梢数とする。

樹勢が強い樹では花振るい防止のため、やや多めに残し、結実の状態をみてから、最終新梢数とする。最終新梢数はスチューベンでは主枝1m当たり8～10本とする。

2 病害虫防除

(1) ツマグロアオカスミカメ

発生の多い園地では、展葉直前（5月上旬）にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍を散布する。

(2) 灰色かび病

新梢伸長期に多発生が懸念される場合は、スチューベンではポリオキシシリン水和剤又はDMI剤（インダーフロアブル又はオンリーワンフロアブル）、シャインマスカットではDMI剤（インダーフロアブル又はオンリーワンフロアブル）を散布し、新梢での被害を防止する。

(3) ベと病

発生が多い園地では、スチューベンでは新梢伸長期（約20cm）にジマンダイセン水和剤、開花10日前（6月上旬）にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、シャインマスカットでは新梢伸長期（約15cm及び約30cm）にジマンダイセン水和剤を散布する。

また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

■薬剤散布【農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況と今年の日候に応じて防除薬剤を選択する。なお、水稻育苗ハウス内にシャインマスカットが栽培されている場合、農薬散布、摘芽・摘梢等各種管理作業は、育苗箱搬出後に行う。

<スチューベン>

散布時	基準薬剤	散布量 リットル/10a	
新梢伸長期 <約20cm> (5月中旬)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200
	又はポリオキシシンAL水和剤	500倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	パダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
又はアディオンフロアブル	1,500倍		
開花10日前 (6月上~中旬)	アリエッティC水和剤	800倍	250
	又はキノンドー水和剤40	600倍	
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	ベストガード水溶剤	1,000倍	
	又はパダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアディオンフロアブル	1,500倍	

<シャインマスカット(露地栽培)>

散布時	基準薬剤	散布量 リットル/10a	
新梢伸長期 <約15cm> (5月中~下旬)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	パダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアディオンフロアブル	1,500倍	
新梢伸長期 <約30cm> (6月上旬)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200
	又はインダーフロアブル	8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
開花10日前 (6月中旬)	アリエッティC水和剤	800倍	250
	ベストガード水溶剤	1,000倍	
	又はパダンSG水溶剤	1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	
	又はアディオンフロアブル	1,500倍	

◆おとう◆

1 結実確保

毛ばたきやマメコバチ等による授粉を積極的に行う。毛ばたきによる授粉は、5分咲き頃と満開期頃に少なくとも2回は行う。

2 摘 果

紅秀峰や樹勢の弱った佐藤錦等は、結実過多により小玉になりやすいため、満開後 30 日頃までに摘果を行う。着果は、1 花束状短果枝当たり 2～3 果程度とする。

3 雨よけハウスの点検と被覆準備

老朽化が進んでいる雨よけハウスが散見されるので、被覆前に点検し、不具合のある場所は修繕する。なお、例年の被覆時期は 6 月上旬頃であるが、開花時期が早い年では 5 月下旬となる場合もあるので、ハウスの点検と併せて被覆の準備をする。

4 病害虫防除

(1) 灰星病

花腐れ防止のため、満開 5 日後の薬剤散布を遅れないように適期に行う。雨が多い場合は晴れ間を見て散布する。

(2) オウトウハマダラミバエ

発生の多い園地では、満開 12 日後と満開 25 日後にダイアジノン水和剤 34 の代わりにアディオフロアブル 2,000 倍を散布する。

■薬剤散布【農薬はおとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

散布時期	基 準 薬 剤	散布量(ℓ/10a)	
満開 5 日後 (5 月上旬)	パスワード顆粒水和剤	1,500倍	500
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	
	又はラリー水和剤	2,000倍	
	又はオーシャイン水和剤	3,000倍	
満開12日後 (5 月中旬)	オーソサイド水和剤80	800倍	500
	ダイアジノン水和剤34	1,000倍	
満開25日後 (5 月下旬)	オーソサイド水和剤80	800倍	500
	ダイアジノン水和剤34	1,000倍	

注) パスワード顆粒水和剤はぶどうの「スチューベン」、「バッファロー (アーリースチューベン)」、「ポートランド」など一部の品種で、軽微な薬害を生じることがあるので飛散させない。

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝などをやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

春の農作業安全運動実施中 4月1日～5月31日
トラクター等の大型機械の使用が始まります
まずはワンチェック、ワンアクションで農作業安全

野菜

霜の恐れがある場合は、被覆等により霜害防止に努めよう！
寒暖の差が大きい時期なので、こまめな温度管理を心がけよう！

◆トマト◆

1 定植後の管理

(1) 手かん水

定植後、活着に日数を多く要し、葉露が発生しない場合は、株元に手かん水を行う。
その時に葉色が淡い場合はかん水を兼ねて液肥を株元に施用する。

■追肥肥料例（葉色が淡い場合）

(2, 100 株/10a)

肥料名	倍数	1 株当たり	必要量/10a	回数
OK-F-1	700倍	300cc	水600リットル：肥料857g	3～4日おき

2段花房開花までは手かん水で生育を揃えるが、根張りを良くするため、かん水は控えめに行う。

(2) わき芽とり

わき芽は定植後に活着してから摘み取るが、傷口を乾かすためできるだけ晴天の日に行う。

(3) トマトトーン処理

1～4段花房は、第4花開花始めにトマトトーンを処理する。

2 かん水・追肥

試しかん水は、2段花房のトマトトーン処理後に1株1リットルを目安に行う。

本格的なかん水・追肥は、3段花房の開花期から行うこととし、1回当たりの追肥量は窒素成分で約0.5kg/10a以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

3 温度管理

ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。最低気温は15℃以上を目標とし、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。

◆メロン◆

1 本畑の準備

定植の2週間前に堆肥・土壌改良資材・基肥を施用し、耕起・整地する。

定植7～10日前に畦立て・マルチングを行い、地温（深さ15cmで18℃以上）及び土壌水分を確保しておく。この時、畦とマルチの隙間を少なくし、密着させると雑草抑制に効果的である。

2 定植時の留意点

定植時には、いわゆる「活着水」として、ぬるま湯をポットにかん水すると良い。
また、活着水に液肥等を入れると発根促進に効果的である。

定植は、温暖な日を選び、夕方までに作業を終えられるようにする。

根鉢を崩さないようにポットから取り出し、深植えにならないように鉢土の上部がマルチ面よりやや高くなるように植え、株元には土を寄せない。

3 定植後の管理

(1) 整 枝

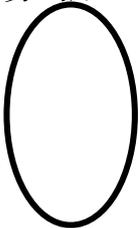
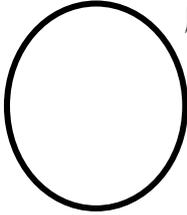
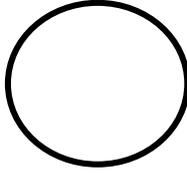
活着後、子づるの伸長を確認したら、生育が揃った2本を残し2本仕立てとする。この際、株元の葉や孫づるなど不要な側枝は除去し、整枝作業終了後に薬剤散布する。

(2) 温度管理等

最高気温 28～30℃、最低気温 12～15℃を目安に、トンネルの開閉、保温資材（保温キャップ等）の活用でこまめな温度・湿度管理を行う。トンネルの換気は苗の反対側のみ裾上げする。

最上位葉展開時、その6～7節上の花芽が分化開始する。子づるの5葉展開時から開花・結実までの管理が良品生産に重要である。

■花芽発育時の条件と果形との関係（タカミ）

【高温・多湿】 草勢が強い	【適温・適湿】 適正な草勢	【低温・乾燥】 草勢が弱い
 <p>腰高が際立ち ラグビーボール状 デバリ果の 発生も多い。</p>	 <p>腰高で、ボリューム 感あるタカミ 本来の形状</p>	 <p>タカミ本来の腰高 形状が見られ ず、円形に 近く、小玉</p>

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

花き

土壌診断に基づくバランスの良い施肥設計で、高品質花きの生産を目指そう！

◆キク◆

1 育苗管理及び定植

8月出荷・無摘心栽培、9月出荷・摘心栽培は、5月が定植適期となるため、出荷時期に合わせて挿し芽作業を行う。育苗期間は15～20日を目安とし、根長が1～2cmになったら定植する。特に小さめのセルトレイで育苗した場合は、苗が老化しないよう注意する。

施肥は全量で窒素成分1～2kg/aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。施肥前に土壌診断を行い、それに合わせて施肥量を調整する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

温度変化が激しい時期なので、低温時には保温を行うなど、こまめな温度管理に努める。

2 病虫害防除

白さび病は、温度20℃前後の多湿状態で発病しやすい。施設内の換気に努め、親株管理の段階から薬剤による予防散布を行う。また、ハモグリバエ類、アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

◆トルコギキョウ◆

1 定植後の管理

昼温25℃以下、夜温15℃を目標に、こまめなハウスの開閉や遮光により適正な温度管理に努める。

定植後は、活着するまで乾燥しないようこまめにかん水し、生育初期に十分な発根を促す。草丈15～20cm以降は徐々にかん水の間隔をあげ、根が深くまで張るよう心がける。

追肥は、生育を見ながら出蕾前までに液肥で3～5回施用する。

2 枝整理と摘蕾

地際から20cmくらいまでの側枝は早めに摘み取り、主茎の生長を促す。その際、付け根から除去しないと、再び側枝が発生するので注意する。また、1番花は手で摘み取れる大きさになったら早めに除去し、その後に出荷時の開花のそろいを考慮して、不要な枝と蕾を整理する。



3 病虫害防除

アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

◆土づくり◆

施設栽培のほ場では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、ほ場準備に当たっては土壌診断に基づく適正な施肥を行う。